教育研究業績書

2016年10月01日

所属：看護学科　　資格：助教　　氏名：田丸　朋子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学，人間工学	看護技術，看護職の腰痛予防
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 養護教諭二種免許状	2011年5月15日～現在	
2. 看護師免許	2004年4月8日～現在	
3. 保健師免許	2004年4月8日～現在	
4. 精神保健福祉士免許	2004年4月23日～現在	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 移動援助動作時の腰部負担評価を目的としたアセスメントツール（TAMAツール）の開発	単	2012年3月	大阪大学	本研究では、上方移動援助での看護師の腰部負担を評価できるツールの開発およびその信頼性と妥当性を検証した。移動援助動作に関する18項目からなる「移動援助動作アセスメントツール（TAMAツール）」を作成した。妥当性の検証では、14名の看護師が行う上方移動援助動作より、腰部椎間板圧迫力（Fc）等を算出した。ツールの総合得点はFcの最大値・平均値と相関があった。信頼性の検証は、看護師のそばで採点する直接目視法と撮影された映像で採点する映像視聴法の2種類にて行った。直接目視法では信頼性が確認できたが、映像視聴法ではできなかった。以上より、TAMAツールは妥当性及び直接目視法における信頼性が確認された。
2. 移動援助時のベッドの高さの違いが患者に及ぼす影響について	単	2009年3月	大阪大学	移動援助が患者の身体負担に及ぼす影響、および看護師の作業効率の違いを検証した。高齢女性14名に対し、76cmと51cmの高さのベッドで移動援助を実施し、胸鎖乳突筋筋電図、心電図、頸部・体幹角度、援助所要時間を測定した。76cmのベッドでの援助時に比べ、51cmでは看護師の援助所要時間延長、体幹角度拡大より作業効率低下がみられた。また、被験者の頸部後屈角度、胸鎖乳突筋筋電図積分値も有意に大きく、患者の負担増大が示唆された。以上より、ベッドの高さ調節は看護師の作業効率をあげ、患者の負担を減少させると言える。
3 学術論文				
1. 看護学部生のリメディアル教育への出席回数のちがいが理科系科目の成績におよぼす影響について	共	2016年3月	摂南大学看護学研究、Vol.4、pp.20-28、摂南大学	看護学生のリメディアル教育への出席回数の違いにより生物・化学の到達度試験点数および「生物・化学の基礎」、「薬理学総論」の科目成績に違いがあるかを検証した。対象は当学部2013年度入学生とし

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				た。到達度試験と「生物・化学の基礎」は出席回数が平均以上の学生の点が有意に高かった（p＜0.01、p＜0.05）。「薬理学総論」も同様の傾向であったが、有意差はなかった。出席回数が平均以上の学生の群には「苦手」の学生が多く含まれていたが、「苦手」の学生が少ない、出席回数平均以下の学生の群の成績を上回ることができた。 (田丸朋子、小堀栄子、後閑容子)
2. ベッドの高さ別に見た患者上方移動援助時の横シーツ使用が看護師の腰部負担に与える影響	共	2013年3月	看護人間工学研究誌、Vol.13、pp.11-8、看護人間工学部会	上方移動時の横シーツ使用が看護師の腰部に与える影響を、ベッドの高さ別に腰部椎間板圧迫力（Fc)を用いて検証した。看護師8名が、適切および不適切な高さのベッドで横シーツ使用あり・なしの上方移動を実施した。適切な高さでは、横シーツあり時の平均・最大Fcが、横シーツなし時に比べて有意に小さかった。しかし、不適切な高さでは、横シーツの有無によるFcの差はなかった。以上より、横シーツ使用は適切な高さのベッドの場合のみ腰部負担を軽減させると言える。 （田丸朋子、本多容子、阿曽洋子、伊部亜希）
3. 移動援助動作時の腰部負担評価を目的としたアセスメントツール（TAMAツール）の開発－上方移動版における妥当性と信頼性の検証－	共	2012年3月	Health and Behavior Sciences、Vol.10、no.2、pp.81-91、日本健康行動科学学会	上方移動における看護師の腰部負担評価が行えるツールの開発、および信頼性と妥当性の検証を行った。妥当性の検証では、14名の看護師が行った上方移動援助より腰部椎間板圧迫力（Fc）を算出した。ツールの総合得点はFcの最大値・平均値と有意な相関がみられた。信頼性の検証では、5名の採点者で19パターンの上方移動を採点した。採点者内・採点者間信頼性の双方で、ICCが全て0.70以上であった。以上より本ツールの妥当性、信頼性が確認された。 (田丸朋子,阿曽洋子,伊部亜希,本多容子,新田紀枝,片山恵,山本美輪)
4. 「特定高齢者」対象の『転倒予防教室』における運動前の足浴の転倒リスク軽減効果の検証	共	2012年12月	日本看護研究学会雑誌、Vol.35、No.5、pp137-144、日本看護研究学会	高齢者に対する運動前の定期的な足浴が、握力に与える影響を検証した。入院中の高齢者に対し、６週間にわたって週２回の足浴を運動前に実施する足浴群と、実施しない対照群を設定し、６週間の前後で手の握力を測定し、比較した。足浴群と対照群の足浴前の握力に差はなかった。足浴群では、右手の握力が有意に増加し、左手も増加していた。対照群では両手とも握力が低下していた。 (本多容子、阿曽洋子、伊部亜希、片山恵、田丸朋子)
5. The Relationship between the Nurses' Low Back Load and the Height of the Bed during Patient Transfer	共	2011年11月	人間工学、Vol.47、No.5、pp.217-221、日本人間工学会	上方移動援助時における看護師の腰部椎間板圧迫力（Fc）に対するベッドの高さ調節の有無が及ぼす影響について検証した。12名の被験者が、ベッドの高さ調節ありの場合となしの場合それぞれで上方移動援助を行った。ベッドの高さ調節ありの場合のFcは、高さ調節なしの場合よりも有意に小さかった。また、ベッドの高さとFcとの間には負の相関がみられた。すなわち、移動援助時にベッドの高さを調節することは、腰部への負担を減らすことにつながるといえる。 （田丸朋子、阿曽洋子、伊部亜希、本多容子、荒岡広子）
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1. アウトプット型研修による知識定着の効果　胸痛を主訴とする救急初期対応の研修を通して	共	2015年8月	第17回日本救急看護学会学術集会	（木原 智枝子、石川 由美、小土橋 美希、森木 ゆう子、田丸 朋子）
2. 色彩を用いた高齢者の転倒予防策の有効性の検討　高齢者体験スーツ着用時の着座動作の検討	共	2015年7月	日本看護研究学会　第41回学術集会	（本多 容子、田丸 朋子、湯浅 美香、井村 弥生、伊井 みず穂）
3. 看護師2名で行う水平移動援助動作における安定性・効率性・腰部負担の検証　低いベッドでの移動援助における腰部負担との関係	共	2014年9月	第22回 看護人間工学部会総会・研究発表会	（田丸 朋子、本多 容子、冨澤 理恵、谷川 茜）
4. 学生が行う患者水平移動援助における腰部負担について　1人で行う場合と2人で行う場合での比較	共	2014年8月	日本看護研究学会　第40回学術集会	（田丸 朋子、本多 容子、冨澤 理恵）
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
６．研究費の取得状況				
1. 認知症の高齢者に対する色彩を用いた転倒予防策の検証	共	2016年4月～	日本学術振興会	平成28年度科学研究費（基盤研究C：16K12226） 分担研究者 （代表：本多容子－藍野大学）
2. 移動援助アセスメントツールの腰部椎間板圧迫力値との関係の検証	単	2014年4月～	日本学術振興会	平成26年度科学研究費（若手研究B：26861878） 代表研究者
3. ）臨床実践内容に基づく基礎看護技術教育におけるスキンケア技術教育の検討	単	2012年4月～	日本学術振興会	平成24年度科学研究費（基盤研究C：24593230） 分担研究者 （代表：田中結華－摂南大学）
4. 移動援助動作アセスメントツールのベッド上での移動援助における妥当性・信頼性の検証	単	2012年10月～	日本学術振興会	平成24年度科学研究費（研究活動スタート支援：24890276） 代表研究者

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1. 2011年1月～現在	日本健康行動科学会
2. 2010年7月～現在	日本健康医学会
3. 2010年7月～現在	日本看護科学学会
4. 2010年5月～現在	日本老年看護学会
5. 2009年6月～現在	日本人間工学会
6. 2009年2月～現在	日本褥瘡学会
7. 2008年11月～現在	日本看護研究学会
8. 2007年6月～現在	日本人間工学会　看護人間工学部会